

教授に就任して



歯科薬理学分野 教授 佐伯 万騎男

平成26年2月1日付で、歯科薬理学講座の教授に就任することとなりました佐伯万騎男と申します。家族を大阪に残して新潟にやってまいりましたが、親切な新潟の方々のお蔭で単身赴任の2か月間とても楽しく暮らすことができました。4月からは家内と小3の双子（男女）の子供を呼び寄せました。

私は平成7年に大阪大学歯学部を卒業しました。学生時代に講義を受けた猪木令三大阪大学名誉教授の後任として歯科薬物学教室を主宰されていた、故斎藤喜八大阪大学名誉教授のお人柄に惹かれ、薬理学を学びたいと考えていた私を、クラス担任の和田健先生（大阪大学名誉教授）が斎藤先生に紹介して下さい、助手に採用して頂きました。卒業後は郷里の千葉に帰ろうかと考えていた私に、和田先生は研究者への道を開いて下さいました。和田先生ご夫妻には結婚式の媒酌人までお願いし、公私両面でお世話になり続けています。

入局と同時に、当時講師をされていた前田定秋先生（前 摂南大学薬学部長）のご指導を受けることができたことは、私の人生最大の幸運のひとつだったと思っています。前田グループは家族のような親密さがあり、極めて恵まれた環境で研究者としてのスタートを切らせて頂きました。私にとって、教育者としての理想の姿は前田先生にあり、大学教員としての19年間前田先生の後ろ姿を追ってきたように感じております。

研究者としての私の真のスタートは上崎善規先生（大阪大学名誉教授、介護老人施設 伊賀ゆめが丘 施設長）が赴任されてから始まったと思っ

ております。NOの発見によりノーベル医学生理学賞を受賞されたMurad先生の片腕として活躍された上崎先生からご指導頂くことで、サイエンスとはどういうものかということがおぼろげながらわかり始め、少しずつ自分の研究テーマを確立していくことができました。Murad先生の師であるSutherland（cAMPの研究によりノーベル医学生理学賞受賞）は、与えたテーマから少しでも外れた実験は一切許さなかったそうで、Murad先生の「自分は束縛されるのがいやだった。だから人を束縛することはしない」という言葉を上崎先生からうかがったことがあります。学位を取得させて頂いた後、平成13年にはテキサス大学のMurad先生のもとで直接勉強する機会を与えて頂きました。5カ月間の留学中は9/11の同時多発テロの勃発直後に一時帰国するなど物情騒然たるアメリカを体験しました。留学中感銘を受けたものに、テキサスの富豪が1920年代のヨーロッパで生まれ育ったシュールレアリスム絵画を収集して作ったメニール美術館と、ヨーロッパから亡命してきた放浪の画家マーク・ロスコがヒューストン郊外に作ったチャペル（ロスコチャペル、ちなみに私の生まれは千葉県ですが、千葉の自慢をさせていただきますと、佐倉にある川村美術館のロスココレクションは一見の価値あります）があります。

振り返りますと、数多くの素晴らしい先生に恵まれました。本稿を読まれている新潟大学の学生さんも、たくさんの先輩のお世話になって欲しいと思います。若輩ではありますが、新潟大学に赴

任した以上は、私も皆様に貢献できるよう務める所存です。

私は千葉県出身で、小学校のころからサッカーを始めました。大のサッカー好きであります。中学校の時、1978年のワールドカップでアルゼンチンが初優勝したときは、サッカー部のユニフォームをアルゼンチン代表チームとおそろいにいたしました。赴任以来、本学の諸先輩方とサッカーのお話をさせていただくなかで、サッカー部後援会に誘っていただきました。そのご好意に甘えまして、本学の卒業生でないにもかかわらず、サッカー部後援会に入会させていただくことになりました。

さすがにプレーするのはしんどくなってまいりましたが、長年サッカー観戦を続けております。ペレやクライフ、ベッケンバウアーなどのプレーを生で見たことがあるのが自慢です。最近はワールドカップの試合もリアルタイムで観戦できるようになってまさに隔世の感がありますが、わたくしにとって人生最高のワールドカップは高校生の時の1982年のスペイン大会で、ジーコやプラティニの華麗な技に酔いしれるとともに、準決勝の西ドイツ対フランス戦の激闘を観戦してドイツのサッカー（華麗とはいいいがたいですが）が大好きになりました。日本でも活躍したリトバルスキーがPKをはずした選手をなぐさめるシーンを30年前にもかかわらず鮮明に記憶しています。その頃の西ドイツの主力はバイエルン・ミュンヘンに在

籍していたカール＝ハインツ・ルンメニグですが、バイエルン・ミュンヘンのような、企業に依存しない地域に根付いたクラブチームを応援するのが長年の夢でした。

今回新潟に来て、その長年の夢がかないつつあると感じております。大阪で幼稚園に通っていた頃からサッカーをはじめた小3の息子がアルビレックスのサッカースクールに入りまして、子供と公園でボールを蹴る喜びをかみしめつつ、週末は家族でビックスワンスタジアムに足を運んでおります。

赴任にあたり、教室の研究テーマを歯科臨床に貢献できるものにしたいとの思いから、分野名を歯科薬理学に改称させていただきました。実際の歯科臨床の場には私たち基礎の人間がお手伝いできる研究テーマがまだまだたくさんあると思います。臨床の先生方とアイデアを出し合い、そのような研究テーマにじっくりと取り組むことで、これまで育てて頂いた歯科の世界の諸先輩方に少しでも御恩返しをしていければと考えております。

最後になりましたが、他学からの赴任で知己の少ない私に対しまして、挨拶を述べる機会を与えてくださった本誌編集関係者の皆様に深謝申し上げますとともに、新潟大学歯学部への更なる発展を祈念して、就任のご挨拶とさせていただきます。どうぞ、これからよろしくお願いいたします。

